

邦楽演奏会

第四十七回

江戸・東京にちなんだ曲を中心には…

常磐津節

清元節

河東節

新内節

小唄

完全入れ替え制・全席自由

第一部 ◎開場十一時三十分／開演十二時

第二部 ◎開場十五時三十分／開演十六時

第一部前半はお子さまにも楽しんでいただける演出です。

平成29年2月25日[土]
国立劇場小劇場

【主催】

邦楽連合会
邦楽実演家団体連絡会議

出演団体

(一社)義太夫協会／清元協会

(一財)古曲会／新内協会

特定非営利活動法人筑前琵琶連合会

常磐津協会／(一社)長唄協会

(公社)日本小唄連盟

(公社)日本三曲協会

【助成】

東京都・(公財)東京都歴史文化財団

【後援】

(公財)日本伝統文化振興財団



ご挨拶

本日は二〇一七都民芸術フェスティバル参加公演「第四十七回邦楽演奏会」にお越しいただきました。誠にありがとうございます。

本演奏会も回を重ねて四十七回目となります。今回から邦楽関係の十四団体で構成される邦楽実演家団体連絡会議が主催者となります（第四十七回は邦楽連合会との共催）、演奏会の開催主旨、目的に変更は無く、邦楽関係団体が一同に揃い、各ジャンルの名演奏を競つてお届けし、わが国の伝統文化の普及、継承を目指すものであります、演奏会の名称、回数もそのまま継承いたしました。今回から新たに小唄、琵琶がメンバーに加わりまして、よりバラエティに富んだプログラムとなりました。

今回新たな趣向といたしまして第一部の前半に子供向けの演目を取り揃えました。邦楽には大人向けの演目が多いのですが、邦楽の雰囲気を子供にも味わつてもらい、将来の邦楽ファン作りの一助にしたいという期待の下、お伽噺を中心に番組構成いたしました。

また、二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックを迎える雰囲気を盛り上げるべく、江戸、東京に因んだ演目を選曲いたしました。曲と曲の間は、邦楽ファンの皆様にはお馴染みの葛西聖司さんの楽しいお話で綴つていただきます。ご来場の皆様には十分にお楽しみいただける様に主催者一同注力していく所存であります。行き届きの点につきましては何卒お許しいただきまして、どうか最後までごゆっくりとご鑑賞下さいますようお願い申し上げます。

邦楽実演家団体連絡会議 議長 川瀬順輔

第47回邦楽演奏会



第一部

三曲 子供のための組曲

義太夫節 かちかち山

文福茶釜

琵琶 笠地蔵

文福茶釜

笠地蔵

（休憩）

小唄

花筏／吉三節分／めぐる日／

神田祭／春風がそよそよと／

逢いたさに来てみれば

清元節

吉原雀

（お宮口説）

新内節

若木仇名草

（お宮口説）

常磐津節

乗合船恵方萬歳

（おみやげつ）

12時開演

三曲 子供のための組曲

箏1 村田 章子

佐々木 千香能

大嶋 礼子

箏2 朝香 麻美子

阪元 沙有理

十七絃 田中 奈央一

小畔 香子

清野 樹盟

尺八1 芦垣 皋盟

尺八2 神 令

三味線 杣屋 三那都

岡安 祐璃花

首藤 久美子

琵琶 梅屋 喜三郎

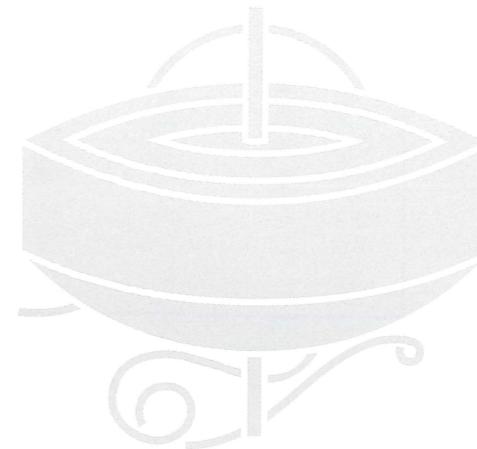
打楽器1 打楽器2 望月 左太寿郎

解説 子供のための組曲

長沢勝俊（一九二二～二〇〇八）が一九六四年に作曲した現代邦楽で、作曲者の代表作であると共に現代邦楽の代表曲のひとつと言えます。作曲者は現代邦楽の演奏団体である日本音楽集団結成第1回定期演奏会にこの曲が初演されました。全5章から成る組曲で、編成は箏、十七絃、三味線、琵琶、尺八、打楽器という多種類の和楽器が用いられ、章ごとにそれぞれの楽器の特色が味わえます。各章の曲調はそれぞれ冒頭に、①軽やかにのびのびと、②ゆったりとうたう感じで、③遊戯唄風におどけて、④しづかに子守歌風に、⑤激しく律動的にと書かれており、作曲者はこの曲について次のように述べています。

「邦楽器による作品はこれ以前に2曲書いているが、作品番号をつけるとすればこの曲からにしたいと思っている。人形劇活動のなかで経験した数多くの貴重な子供たちとのふれあいをモティーフにして、その生活を画いたものである。邦楽

の世界には不思議に子供の世界を画いたものが少ない。この曲は私が、子供も大人も私自身も含めて、日本の楽器、そして日本の音について考えてみたいという希いをもって書いたものである。」



義太夫節 かちかち山

解説 かちかち山

初代竹本綾之助原案・鶴澤三寿々補曲。江戸の昔から各地に伝わるおとぎ話をもとに、大正時代の初めに作られた義太夫節です。

昔々、お爺さんとお婆さんが仲睦まじく暮らしていました。山仕事に精出すお爺さんに悪さを繰り返す狸があり、怒ったお爺さんは、ついに狸を生け捕りにします。お爺さんの仕事仲間が、お爺さんより先に狸を担いで家に届けると、悪賢い狸は、お爺さんの戻らぬうちにお婆さんを騙して痛めつけ、山へと逃げ帰ります。家に戻ったお爺さんが、お婆さんの死を嘆いていると、兎がその訳を聞き、狸への復讐をかって出ます。兎は素知らぬふりで狸を柴刈りに誘い、背負った柴に火打ち石で火をつけます。その「カチカチ」と鳴る音で、このお話が「かちかち山」と呼ばれるようになります。兎の計略で泥船に乗せられた狸は、背中を冷やそうと海へ向かいます。兎の計略で泥船に乗せられた狸は、見えなく海に沈み、お婆さんの敵討ちは成功するのでした。

詞章

よろずよ
萬代に芽生の和子がお伽草、添乳枕の片言に、むかしむかし
その昔、爺と婆とがあつたとぞ、

「これこれ婆様や、こちの爺様がえらい手柄、鎮守の森のももんがあ化提灯の古狸を、なんと見されやこの生捕り、われらは後の棒ちぎり、鼻は明いたり紐通し、面目ないがかつぎ役」何が先ず手柄手柄とほめそやせば、婆はほくほく笑顔をつくり、

「オオそりかいのう、したが爺が手柄と言つものの、そなた衆が附いて居りやこそ、こりや村中の手柄じやわいの、そして爺さまは何處ぞへ行てかの」

「オイノ、庄屋様へちょつくら寄つて狸話をしてくるげな、狸置いたら又出なおし、存分よばれに来ようぞや」と喰わぬ内から腹鼓、打はやしてぞ帰り行く。

後に狸はいましめの縄もゆるみも泣くばかり、婆は見る程小

淨瑠璃 竹本 越孝

三味線 鶴澤 三寿々



鶴澤 三寿々 (つるざわさんすず)
東京音楽大学ほか講師。平成一九年(財)清榮会奨励賞受賞。平成三年義太夫協会主催第四三期義太夫教室を経て竹本駒之助に入門。六年初舞台。平成十三年度文化庁芸術インターーンシップ研修員。十三年より「素淨瑠璃の会」を主催。



竹本 越孝 (たけもとこしこう)
義太夫節保存会理事。平成一二年重要無形文化財保持者総合認定。平成一〇年(財)清榮会奨励賞受賞。昭和四十八年竹本越道に入門、四十九年初舞台。五十九年豊竹呂太夫に師事。平成二年より「越孝の会」を主催。

氣味よく、

「憎いやつめ、やがて爺様が戻ろうなら振舞の狸汁、人をあやめた天罰で人に喰われてしまふげな」

と縄引き立てて古柱、くくし付ければしほしほ涙、哀れ見せるも嘘の皮、狸は声をくもらせて、

「ああもし婆様、化け脅した身のむくい、味噌汁攻めもいとわねど、穴に残した妻や子が、後の嘆きはいかばかり、思えば過し月の宴、八畳敷きの草むしろ、狸ばやしも今は早、破れ鼓となつたるか、せめて最後の思い出に、聞こえぬまでも別れの鼓、小手をゆるめて打たせて」

と身をもがき泣く有様に、

『とても叶わぬ命の際、爺様の戻つて来ようまで名残の鼓打たせてやろ』と、また化かさるる空言と知らぬ仏氣老心、小手をゆるめいましめのあやうき業の綱わたり、得たりと立てたるかくし爪、驚く婆を突き倒し、起きんとするを引きすへて、思い知れやとかきむしる、

「あれえ爺様、村の衆いの」

と、助けを呼べど声つまり、敢えなく息は絶えにけり。

かくとは誰が白兎、とくさ畠の戻り道、柴の戸漏るる声聞きつけ、是は如何と尋ね寄り、

「オットよし、この兎が合点、婆様が敵討つてくれる、爺様必ず心配せまい、これから山へ追いかけて、柴の火あぶり力チカチ、逃げれば海へどんぶり、村の衆見えた後からごんせ」と言つが早いか跳ね兎、勇んでこそは飛んで行く。

山又山の小夜嵐さよあらし、そよぎの音も暗き身の、こけつまろびつようようここへ、海近くたくみと知らず土船へ、ヒラリと載つてもやい綱、解く間も心沖津波、逃ぐるをやらじと兎は木船、腕にまかせて漕よせ漕よせ舵柄かじつか取つて打ちかければ、狸も今は死にもの狂い、互に争う二打三打、受けるを刎は（ねのけ振り下す目にもとまらぬ兎の早業こりやかなわぬと命の面舵おもかじ、息せき狸はヤツシツシイヤツシツシイ、兎は身軽にヤツシツシヤツシツシイ、寄す浪引く浪、渦まく浪、土船の櫓らがい



は重くコリヤどうじや、逃げも叶わぬ大汗に、兎は得たりと木船の舳先へさき、土船目がけてつゝかくれば、汐に甲斐なき土崩れ、見る見る舟はぐづぐづ、ともに狸の沈みつ浮いつ、苦しむ様ぞ笑止なり、爺は岩根に小手かざし、続いて集う人々が、加勢の声の勇ましく、しゆびの花咲き勝兎、きたえの杵の連れ拍子、沖の千鳥のみなめざめ、羽音も和して喜びに、明け行く空の東より、海原染むる朝日影、狸の腹へ満汐のしづまる御代の絵そらごと、お伽草紙とぎぞうしを綴じおさむ。

琵琶

山下 晴楓



山下 晴楓（やましたせいふう）

昭和十二年九月七日、北海道旭川市生まれ。昭和三十三年、伊藤海風師に師事し吟詠を学ぶ。昭和三十四年、薩摩琵琶晴風会初代会長・浅野晴風師に師事し薩摩琵琶を学ぶ。明治期の伊集院鶴城師の弾法を継承する（私で4代目）。昭和三十八年、東京新聞社主催邦楽コンクール・琵琶の部で二位入賞。昭和四十四年、日本琵琶楽協会主催・琵琶楽コンクール一位入賞。文部大臣奨励賞、NHK会長賞、日本琵琶楽協会会長賞等を受賞。昭和五十五年、浅野晴風師亡き跡を継ぎ、晴風会会長となる。平成八年、日本琵琶楽協会・理事長。平成十三年、日本琵琶楽協会・副会長。

解説

文福茶釜

ぶんぶくちやがま

詞章

むかし上野の館林に、茂林寺といふ寺があつたげな。そこの和尚さんお茶がすき。或日茶釜を買って来て、たいそうそれがお気に入り、お経をよんでくたびれて、和尚さん机によりかかり、コクリコクリと七五調の文語体ですが、この曲は、子供達向けに「お伽琵琶」として作られたこともあり、今でも分かりやすい歌詞になっています。あらすじは茂林寺に伝わる、狸の化けた老僧が持つてきた茶釜は、お湯を汲んでも汲んでも無くならなかつたというものは違ひ、児童文学者・巖谷小波作のおどぎ話「文福茶釜」をもとに作られたと思われ、寺の和尚さんが買つてきた茶釜が、狸の化けたもので、和尚さんが寝ているときに、首や手足を出して歩きだし、小坊主が見つけて大騒ぎをしますが、和尚さんが目を覚ますともとの茶釜のままでいます。また、和尚さんが茶釜を火にかけると、熱い熱いと逃げだし大騒ぎ、捕まえられて狸の化け茶釜であることを白状します。和尚さんは狸の茶釜は珍しいとお寺の宝となつたというものです。

茂林寺のものは、福を分け与えるというところから「分福茶釜」と名付けられました。

また、一説にはお湯の沸く「ぶくぶく」という音から「ぶんぶく」と呼ばれたともいわれています。

長唄 笠地蔵

唄

吉住 小三郎

吉住 小三郎（よしずみ こさぶろう）

昭和三十九年、六代目家元の長男として東京に生まれる。

流儀の原点である演奏会「研精会」を中心として活動。平成二〇年に長唄吉住会七代目家元を襲名。長唄協会常任理事、NPO法人三味線音楽普及の会副理事長。

吉住 小与ひで
吉住 小十秀

三味線 吉住 小三代

吉住 小代英
吉住 小愛美

陰囃子 望月 左吉

望月 左京

望月 左太寿郎
望月 美沙輔



吉住 小三代（よしずみ こさよ）

能楽の家に生まれ長唄の世界に嫁ぎ、幼少より古典芸能の世界で育つ。現在は和の文化の伝承をライフワークとして活動。NPO法人三味線音楽普及の会理事長。長唄吉住会代表。

吉住 小三郎（よしずみ こさぶろう）

昭和三十九年、六代目家元の長男として東京に生まれる。

流儀の原点である演奏会「研精会」を中心として活動。平成二〇年に長唄吉住会七代目家元を襲名。長唄協会常任理事、NPO法人三味線音楽普及の会副理事長。

解説 笠地蔵

詞章

長唄は江戸長唄ともいわれ、江戸時代中期に歌舞伎の伴奏音楽として発展しました。当時の流行や世相を取り入れた作曲も多く、この頃の江戸文化の様子を垣間見ることが出来ます。大半の曲は明治期までの作曲ですが、この曲は長唄の現代における普及発展を期して、昭和五十一年に長唄協会演奏会のための委嘱作品として発表されました。内容はお馴染みのお伽噺で、雪の積もったお地蔵さんが恩返しに訪れるというのですが、作曲においては従来の古典の手法にとらわれず、西洋音楽的な音階やリズムを取り入れた意欲的なものとなつており、その意味で今の時代を表す長唄と言えるかもしれません。作曲は六代目吉住小三郎、作詞は千野喜資です。

昔々ある村に爺と婆が住んでたとさ 爪は編み笠こしらえて町へ売りに行つたとさ 三日に一度は行つたとさ 子供が道で遊んでた 暮れの寒い曇り空 ちらりちらちら雪降つてどうしたことが編み笠が一つも売れずに残つてた いつも売れずに残つてた とぼとぼ帰る峠道いつしか吹雪になつたとさ 六つ並んだ峠の地蔵 雪の地蔵で立つていた地蔵様かわいい寒からう 我が子に話す様にして 六つ並んだ地蔵様に編み笠かぶせて帰つたとさ 六台の地蔵さ笠とつてかぶせた爺の家はどこだ 爪の家はどこだ 爪の家はどこだ（繰り返し） 六台の地蔵に笠とつてかぶせたはこの爺じや爺の家はここだ 爪の家はここだ 外でどっさりどっさりと物音激しくした後は そり引く音が遠ざかる 外へ出て爪は驚いた驚いた 呼ばれた婆も驚いた 驚いた 外にどっさりどっさりと米麦反物投げ出して そり引く音が遠ざかる 外へ出て爪は驚いた驚いた 呼ばれた婆も驚いた驚いた 戸口にどっさり宝物置いて帰る人影は編み笠付けた笠地蔵 寒い月夜の後ろ影 六つ並んだ人の影爪と婆は伏し拌む 峠を守る六地蔵 昔話にあつたそつた

小唄

花筏／吉二節分

他

ご祝儀 花筏
はないかだ

吉二節分 全員

唄 神田祭 糸
蓼 津留染 糸
鈴 絡

めぐる日

唄 嘴 松峰照
扇 よし和 吏美 いち絵

神田祭

春風がそよそよと
逢いたさに来てみれば
全員



ふじ松 加奈子 (ふじまつかなこ)
新内小唄、扇派二代目家元。昭和五十七年清元一寿郎に師事、平成三年宮蘭千愛に師事、公益社団法人日本小唄連盟理事。



ふじ松 加奈子 (ふじまつかなこ)
扇派二代目家元。昭和六十一年二代目襲名、昭和四十六年初代家元扇よしに師事、清元秀寿太夫に師事、後清元秀二郎に師事、平成四年東明吟泉に師事、平成五年社団法人日本小唄連盟若樹賞受賞、公益社団法人日本小唄連盟理事。



扇 よし和 (おおぎよしかず)



松峰 照 (まつみねてる)

松峰派二代目家元。平成十一年二代目襲名、昭和五十四年清元清寿太夫に師事、昭和五十八年大和美世葵に師事、後大和久満に師事、昭和五十五年NHK邦楽オーディション合格、平成五年社団法人日本小唄連盟若樹賞受賞、公益社団法人日本小唄連盟理事



吏美 いち絵 (さとみ いちえ)

昭和六十年竹苑せきに師事、平成七年春竹利昭に師事、平成七年清元幸寿太夫に師事、平成七年吏美いち絵を名乗る。平成五年社団法人日本小唄連盟若樹賞受賞、公益社団法人日本小唄連盟理事



蓼 鈴緒 (たですずお)

昭和五十四年蓼胡鈴に師事、平成十二年蓼奈美輝に師事、平成八年社団法人日本小唄連盟若樹賞受賞。

花筏 解説

吉三節分

小唄連盟のご祝儀曲。

歌舞伎「三人吉三巴白波」の一場面を草紙庵が作曲（昭和六年）。お嬢吉三の名せりふから始まり名せりふで終わる粹な小唄です。

めぐる日

延宝の頃江戸市中に大神樂がはやり町の人々に人気があつた。常磐津所作事「神樂諷雲井曲鞠」の舞台に大神樂の「どんづく」というおどけ唄と洒脱な踊りがありその中に端唄がとり入れられその曲が現在江戸小唄としても唄いつがれています。唄の意味は若いうぐいすが梅の咲くのを待ちかねてまわらぬ節で朝早くから鳴きおこされた芸者が粹な文句を言つところです。

神田祭

江戸時代神田祭は秋祭で「山王祭」と共に天下祭と呼ばれ、豪華であったが明治十七年に伝染病がはやり現在の五月十四、十五日に行われる様になった。三世清元梅吉の作曲で清元「神田祭」の華やかさといなせな味をとり入れた曲です。

花筏

新しく結ぶつどいの花筏

固きちぢりに三味線の音も冴え渡る

日本晴れ変わるまいぞの約束は

千代田の松の千代かけて長く栄えん

唄の道づれ

春風がそよそよ
逢いたさに来てみれば
二曲とも廓を唄つた曲で「山谷の小舟」の替歌。

「春風がそよそよと」は節分の豆まきをした翌日の立春梅が香つてくる部屋に遊女と客が今降ってきたのは雨か雪かそれなら居続けしようと盃を傾ける情景を唄つたもの。

「逢いたさに来てみれば」は客が会いに来たのに遊女は酔つていて泣いたり笑つたりあげくに寝てしまう。それが可愛くて覚めるまで居続けようという情景を唄つたもの。

竿の雫か濡れ手で泡

「おん厄払いましょう厄落とし」

「ほんに今夜は節分かこいつは春から」

縁起がいいわえ

吉三節分

「月も朧に白魚のかがりも」霞む春の夜に
冷たい風もほろ酔いの気持ちよくうかうかと
浮かれ鳥のただ一羽ねぐらへ帰る川端で

竿の雫か濡れ手で泡

「おん厄払いましょう厄落とし」

「ほんに今夜は節分かこいつは春から」

縁起がいいわえ

めぐる日

めぐる日の春に近いとて
老木の梅もわかやぎて候
しおらしやしおらしや
香りゆかしと待ちわびかねて
笛鳴きかけるうぐいすの
来ては朝寝を起こしけり
さりどは氣短かな今帶締めてゆくわいな
ほうほけきようとい人さんじや

春風がそよそよと

春風がそよそよと福は内へとこの宿へ
鬼は外へと梅が香添ゆる雨か雪か
ままよままよ今夜も明日の晩も居続けしよつ生姜酒

逢いたさに来てみれば

逢いたさに来てみれば居ながら酔うて寝てしまい
後は泣いたり笑うてみたり愚痴を並べてままよままよ
今夜も明日の晩も居続けしよ茶碗酒

神田祭

勢い肌だよ神田で育ちや
わけて祭りの派手好み
派手な様でもすつきりと

足並み揃えて練りだす花山車

オーヤンレ引け引け

良い声かけてそよが締めかけ中綱よいよい

オーエンヤリヨー伊達も喧嘩も江戸の華





淨瑠璃 清元 延栄雪
清元 延清恵
清元 美佳代 清元 美喜了

三味線 清元 延美葉
清元 梅弓
清元 延亞季郎



清元 延栄雪 (きよもとのぶよしは)
昭和三十三年清元延栄喜美に師事し、昭和四十年に清元延栄雪の名前を許される。昭和四十九年に清元延栄雪の名前を許される。また、清元一寿郎、清元梅吉、清元美治郎、清元ディショニ合格。昭和四十六年NHK邦楽技能者育成会第十六期終了。現在は清元美治郎に師事。清元の他宮園千寿に師事し、都一たみ、東明喜舟、春日とよ一子、荻江こうの名前を持ち、演奏会、舞踊会、放送など多方面で活躍中。清元宗家高輪会会員。清元協会会員。

清元 延美葉 (きよもとのぶよしは)
清元寿國太夫に師事し、昭和四十九年に清元延美葉の名前を許される。また、清元一寿郎、清元梅吉、清元美治郎、清元菊輔にも師事し現在に至る。他に十一世都一中、宮園千寿に師事し、都一たみ、東明吟美の名前を持ち、演奏会、舞踊会、放送など多方面で活躍中。清元宗家高輪会会員。清元協会会員。

解説 吉原雀

よしわらすずめ

文政七年（一八二四）開曲

（作詞）三樹屋二三治

（作曲）初代清元齊兵衛

吉原雀とは元来葭切の異名ですが、廓の冷やかし客を指す意味もあります。

江戸中村座の「茶の湯景清」の大切り所作事で、初代清元延寿太夫が語りました。

初演は七代目市川團十郎と、七代目岩井紫若が鳥売りの夫婦という配役で、歌詞にある三升は団十郎の紋、三つ扇は紫若の紋です。

詞章は明和五年（一七六八）十一月に開曲された長唄の「教草吉原雀」（初代桜田治助作詞、富士田吉治・杵屋作十郎作曲）をそのまま取り入れています。江戸の吉原仲町にやつてきた鳥売りの夫婦が、生き物を放す放生会の由来や、廓の風俗、女郎と客の駆け引きの様子を踊って見せる内容です。清元では後半でぐっと趣を変え、投げ節や新内がかり、鳥づくしのチヨボクレを取り入れて、清元の特徴を發揮しています。

詞章

へ俳優の昔を今に教え草 吉原雀のふるごとを ここに移して三つ 扇 誰も三升とやつ仕事へその手で深みへ浜千鳥 通い馴れたる土 手ハ丁 口ハ丁に乗せられて 沖のかもめのへ二挺立ちへ三挺立ち へ素見ぞめきはむく鳥の 群れつきつき格子先 叩くくいなの口 豆鳥に 孔雀ぞめきで面白押し 見世すががきのてんてつとさつさ 押せ押せ工

へ馴れし廓の袖の香にへ見ぬ様でへ見る様でへ客は扇の垣根よりへ 初心可愛ゆく前渡り へさあさあ来たぞ来たぞ 来たぞよ へさあ 来たまた来た へなに さしががあると へさわりじやないか へ さしもすさまじいわ へまたおさわりか へおい せんしゅう 賴 むぜ へお腰の物も合点か へそれから傘そこへ置くぜ へ二階 座敷は へこう 右か 左か へずっと 奥座敷でござりますへ新 造そさまは へ寝ても覚めても 忘られぬ へどうぞ二人がこつそりと へ深山の奥のその奥の ぐつとの奥の侘び住まい へ憎いぞえ へそうした黄菊と白菊の 同じ勤めのその中にへきりと呼ばれる、果 敢なさは へ年があくのを待ちかねて やっぱり下端と呼ばれたく 男故なら楽しみに へよしてくれ よしてくれよ へ ジ原雀のひながら飼われて へ山雀ア 小雀の口ばしなんぞで 手練 の初音を 聞いてもくんね へ嘘鳥やないと日文の駒鳥 そこらの 目白が 見つけてせきれいへ約束雲雀は昼でも葭切 ちょっと格子 へ顔とり出せとは さりとはひわ鳥へうぐいすウの 魂胆秘密は 手管のくだけへ奇妙鳥類 かごの鳥へ訳も何やら可笑しらし へ実 に花ならば桜時 月なら最中竹村に その青楼の名にしおう 新吉 原と言つ雀 今に うわさや 残るらん

解説 若木仇名草（お宮口説）

詞章

初代 鶴賀若狭操作曲
新内節本名題「若木仇名草」通称を蘭蝶
江戸の廓、吉原の話
市川屋蘭蝶と言ふ浮世声色身振師は榊屋此糸と馴染を重ね、
女房のお宮が身を売った金まで入れあげてしまします。お
宮は客となつて此糸と逢い、蘭蝶との夫婦の成立ちを語り
ます。「……ありんす」の廓言葉を使つています。新内
と言えば蘭蝶、蘭蝶と言えば「縁でこそあれ……」と
言うくらい馴染まれている代表曲です。

「引けすぎの 廊下をつとう足音も 小耳にさわる夜回りの
声さえ辛き長の夜に お宮は心安からず 暫し座敷に待ち
いたる
「言わねばいとせきかゝる 胸の涙のやるかたなさ、
「アノ蘭蝶殿と夫婦の成り立ち、話せば長い高輪で、ひとつ内
に互いに出居衆」
「縁でこそあれ未かけて 約束固め身を固め 世帯固めて落
ち着いて ア、嬉しやと思うたは ほんに一日あらばこそ
「ソリヤ誰ゆえじやこなさんゆえ」
「大事の男をそゝのかし 夜昼となく引き付けられ 商売ご
とは上の空 革履で呼んでくださいんす 馴染みのお客 茶屋
衆も 来るたびごとにまた留守かと 愛想尽かされ後々は
呼んでも内証の 詰まり詰まってわたしが身を 売つ
て渡したその金を またこなさんに入り揚げられ 嬉しかろ
うか よからうか 腹が立つやら 悔しいやら 喰い付きた
いほど思つたは 今日まで日には幾たびか その恨みをも打
ち捨て、互いのための心底話

淨瑠璃

鶴賀須磨寿々啓

三味線 富士松菊三郎
上調子 鶴賀寿々貴代



富士松菊三郎（ふじまつしきくさぶろう）
東京都出身。父鶴賀直太夫に手ほどきを受け、のち須磨派
家元鶴賀新内に師事。昭和三十六年鶴賀須磨寿々の名を許
される。平成七年須磨派二代目家元に就任。東京・神戸に
稽古場を持つ。新内協会理事。



鶴賀須磨寿々（つるがすますず）
東京都出身。父鶴賀直太夫に手ほどきを受け、のち須磨派
家元鶴賀新内に師事。昭和三十六年鶴賀須磨寿々の名を許
される。平成七年須磨派二代目家元に就任。東京・神戸に
稽古場を持つ。新内協会理事。

常磐津節 乗合船恵方萬歳

淨瑠璃

常磐津 清若太夫

常磐津 若羽太夫

常磐津 松希太夫

三味線

常磐津 一寿郎

常磐津 美寿郎

岸澤 満佐志



常磐津 清若太夫（ときわづきよわかだゆう）
昭和二十二年生まれ。昭和四十三年常磐津菊路太夫に入門、常磐津菊寿郎にも師事。同年一路郎許名。昭和五十九年一寿郎と改名。平成元年清榮会奨励賞、平成十七年十二代富本豊前継承。常磐津協会理事、常磐津保存会理事。



常磐津 清若太夫（ときわづきよわかだゆう）
昭和二十一年生まれ。三十二年四世松尾太夫に入門。四十一年三十三中学校に於て、邦楽鑑賞教室を実施。延べ二七五校、参加・体験生徒数は十二万人を超える。常磐津協会理事・事務局長。江戸川邦樂邦舞の会代表。十二年重要無形文化財常磐津節（組合認定）保持者に認定。十五年江戸川区文化功績賞を受賞。二十八年旭日双光章を受章。

解説

乗合船恵方萬歳

作詞は三世桜田治助、作曲は五世岸沢式佐。

天保十四年（一八四三）江戸市村座での正月狂言。

「魁香樹いせ物語」の大切として上演された曲で、常磐津・富本・長唄・義太夫の四段返しの変化舞踊の一つでした。

後に此の曲が独立して「乗合船恵方萬歳」として盛んに上演されています。初春、隅田川の渡し場に来合わせた万歳の太夫・才蔵・大工・白酒売り・芸者・通人・女船頭の七人が登場。江戸末期の下町、春らしい気分の溢れる常磐津の代表曲の一つです。

今日は時間の都合で、万歳の部分を割愛して演奏します。
舞台面は縁起の良い、七福神の宝船にも見立てられていました。

す。

詞章

へ筑波根の、この面かの面と口まねに、問ず語りを庵崎の、比べようなきありがたさ、睡み話の向こうより、海上はるかに見渡せば、〈合方〉へ五色彩る宝船、よい乗合と座せられても、乗遅れたはいぶかしな、へ色にや賢いそれ様なれど、なじよにさつしやれた、えい、ええ、ええ恋知らず、

へい、や悔むな、そこへ気のつかぬ、へへ、太夫じやなつけれど、何れも様へあらためて、御祝儀申し入りのある、へ芝居をちょっと立見して、つい遲なわる御無礼と、足を早めて来りける。

才蔵「やれく嬉しや嬉しや、わしはまた向うへ越る船じやと思うた、やあ美しい姉えたちが、いや、これはありがたい、ありがたい」

太夫「あ、これく、そのように女さえ見ると、いやもう埒もないことを、女のない国から参ったように、無性にありがたがる事はないわさ。第一わしが、ええ、外聞が悪いわさ

才蔵「あ、これく太夫さま、はるばると三河の国からこうして来るも、お江戸さあの美しい姉えたちを、へへ、見物がてらじやて、まあ、一服吸つべえかな」

通人「ほほう、さては足下たちもすこぶる好色家と見へるね、極く嬉のだ。はははは、や、頼も頼も」

大工「しかしながら袖振り合うも他生の縁だ。何ぞ面白え話

をみんなやつつけねえ」

女「ほんにそれが、よう、ござんしょう」

大工「まず初春の事だから、白酒屋さん、お前先いやつつけ

ねえ」
「りは」
白酒屋「へえさようならばお望みに任せ、そもそも白酒の始

りは」

「へ富士の白雪や朝日で解ける。」

島田はさ、「口説の半ばでさ、寝て解ける。」

通人「是は白酒の先生、妙、ははははは」

才蔵「さあくこれから番匠殿、お手前の番じや、お手前の

番じや」

大工「ええ、仕方がねえ、そんなら大工道具になぞらえて、こじつけ話をやつつけべえ」

「そもそも番匠の始りは、叩き大工のこちとらが、聞ても上の空仕事、嘘を突き鑿、差曲尺を、使ひ馴たる友達と、へ直にうら釘返して後は、ほんに辛氣な溝鉋、憎や節木の性悪と、才蔵「さあくこれから宗匠先生、玉句を承りどうござる」

大工「その発句とやらばつくとやら、早く聞いてえね。」

「早くくくく」

通人「あ、さな宣いそ、諸事風雅の狂道は、士農工商の業

道までも、穿たねばならぬて。ええ凝っては思案に能わざと

申せば、各々方、ま、騒がせ給うな、騒がせ給うな、ええこうつと、春風、ええ春風や」

「へ春風や、黒羽織に小脇差を差いて、ゆらりゆらりと船場へ下りやる。」

通人「ううい、いや甚だ銘酌、時に景色は未明の事に限りやすね、白昼は埃まんまとして、野暮者たっぷ、これ、恐るべでげす。こい願わくば、船衆急ぐべだよ」

通人「サアひとつきこし召せ」

「へこちらも急ぐ送り船、おや、程なく着岸。ふふふ、ははは、ふふ、はは、うはははは、ははは、笑い高

じて腹立てて、えいええ、筋をゆうべや、泣き上戸。」

女「さあく三河の太夫さん、これからはお前の番じや、お前の番じや」

太夫「これはまた迷惑な、才蔵、仕方がないわ、まず初春の事じやから、おめでとう寿を、さらばお祝い申そう」と、

「へ鼓おつとり声つくろい、へほほやれほやれまっちゃらこに、まんざらこ、まんざら野暮ではどうした才蔵、ありやせまい、代々栄へてごまんの長者よ、ああ、なお万歳楽までもやら、へへ、おめでとう。」

「へともに嬉しき乗合に、声春雨と鳴り響く、初雷に人々は、恵方をさして急ぎ行く。」

第47回 邦楽演奏会

第一部



清元節 山帰り

琵琶 曲垣平九郎

新内節 明鳥夢泡雪（部屋）

まがきへいくろう

まがきへいくろう

常磐津節 権八（廊の仇夢）

さとあだゆめ

河東節 廊八景

くるわはつけい

義太夫節 蓼太平記白石嘶より 「新吉原揚屋の段」

ふうりゆうふなぞろい

16時開演

清元節

山 帰 り

解説 山 帰 り

文政六年（一八二三）開曲

（作詞）二世桜田治助

（作曲）初代清元斎兵衛

この淨瑠璃は文政六年、江戸森田座の八月狂言に七代目守田勘弥の五十回忌追善として、三代目坂東三津五郎が上演した「法花姿色同」という五段返しのうち四番目の所作事です。

大山詣りは、鳶や火消し、大工といった職人たちが、江戸から十八里の相模大山の石尊様（伊勢原市の阿夫利神社）へ巨大な納め太刀（木で出来た太刀）を江戸から担いで運び、滝で身を清めてから奉納と山頂を目指すという、ほかに例を見ない庶民参拝で、江戸の人口が百万人であった頃、年間二十万人もの参拝者がありました。山帰りとはその帰りの道中で、行きは殊勝でも帰りは破目を外すことが多かつたようです。粹にこだわる江戸っ子らしく、納め太刀の大きさや、滝垢離で見せる彫り物を競つたようです。舞台は江の島と書いた道するべの見える相州の海岸で、襟に大和屋と染め抜いた印半纏をまとい、鉢巻、雪駄履き、肌には彫り物といった勇み肌の一人踊りになっています。

詞章

ヘ伊勢の御が 玉なしの里ならずして 魂棚飾る我が宿の
後は 野となれ山詣り ヘ何のその 男は裸百貫の ヘか
け念仏も向う見ず 夜山で盆をすっぱりと 切払つたる納
太刀 ヘ諸願 定宿 子安まで 下りて五六の蚊帳の内
ヘ四六のあまに劣つたる どぶつに二朱文有難え ヘよい
福の神江の島に 食いあいないと唐人と 横にかすつて
神奈川の ヘ便りの文に鞍替えを 尋ねて奇特なべらぼう
は 我身ながらも 羽根澤屋 ヘのろい懐の刺者へ ヘま
だ引導を 渡さずに あつたとこから物言いを 嫌味な奴
さ どうだろう ヘ四谷で初めて逢つた時 好いたらしい
と思うたが 因果な縁の糸車 ヘ巡り巡つて大山も 石尊
さんの 引き合わせ ヘ思えばほんに南無奇妙 頂來な
うまい仲ではないかいな 色にや命も やり放し ヘ大和
人形 大和屋が 庄内節でやつてくりよ ヘ親が叱ろが
折檻しようがのまゝよのこれ 惣れた殿さが 捨てらりよ
か ヘいさゝか さつと出す船は ヘ船は稻荷丸 船頭衆
は ヘ狐 やつとこせ 汗かいして しょんなんぐれ ヘ若い
時や 二度無い ヘその氣でなければ 生物は食われぬ
へしょんなんぐれ 恐ろしいではあるまいか ヘ明日朝顔の
かけ流し そこが江戸っ子 紫と 勇みは水によるならん
勇みは 水によるならん

淨瑠璃

清元 初栄太夫

清元 清美太夫

清元 成美太夫

三味線

清元 志寿造

清元 美三郎

清元 美十郎



清元志寿造（きよもとしじぞう）

東京出身。昭和五十四年清元志寿太夫、清元延香夫妻に入門。昭和五十八年清元志寿造の名前を許され、二十歳から歌舞伎公演に出演する。昭和六十二年ロシア歌舞伎公演に出演。平成十六年浅草新春歌舞伎にてタテ三味線を務める。平成二十二年にロンドン・ローマ歌舞伎公演に出演。現在も歌舞伎公演を中心に舞踊会、演奏会、放送などで活躍する。平成二十年清栄会ア歌舞伎公演出演。平成十六年浅草新春歌舞伎にてタテ三味線を務める。平成二十二年にロンドン・ロー

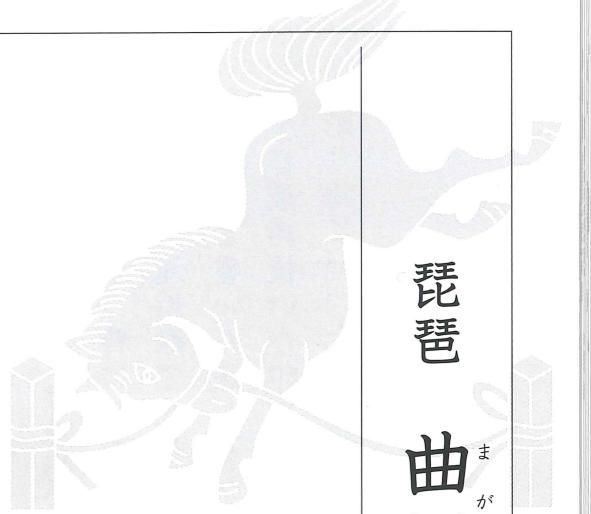


清元初栄太夫（きよもとはつえだゆう）

東京出身。父は初代清元初栄太夫、息子に二代目清元清美太夫を持つ三代にわたる清元一家。昭和三十四年に清元清美太夫の名を許され、平成六年に二代目清元初栄太夫を襲名。永年にわたり東京浅草組合、札幌見番、向島墨堤組合の見番師匠を務めるほか、清元初栄

会を主宰しプロや愛好家の指導を行っている。演奏会、舞踊会、放送などで活躍中。昭和五十八年芸術祭賞優秀賞受賞。平成二年清栄会奨励賞受賞。重要無形文化財清元節保存会会員。清元宗家高輪会理事。清元協会理事。

琵琶 曲垣平九郎



琵琶

奥村 旭翠



奥村 旭翠（おくむら きよくすい）

筑前琵琶橋流日本橋会大師範。人間国宝。昭和四十八年から山崎旭翠に師事。昭和五十一年NHK邦楽オーディション合格。平成八年大阪文化祭賞、平成二〇年大阪市民表彰。平成二十七年第三十六回松尾芸能賞優秀賞。

解説

曲垣平九郎

作曲 橋旭宗 作詞 田中濤外

作曲時期 昭和七年ごろ

愛宕山（港区）は標高わずか二十六メートルながら、東京二十三区内では最も高い天然の山です。頂上の愛宕神社本殿前には男坂（現在八十六段）が麓からまっすぐに通じていて、傾斜角四十度の階段真下に立つと、垂直な壁に面しているように感じられます。男坂の脇の女坂（一〇七段）も、踊り場はあるものの今の感覚では結構な急坂です。

講談では、寛永十一（一六三五）年、徳川家光のきまぐれな命に応じて、讃岐の藩士、曲垣平九郎が男坂を騎馬のまま上り、頂上で梅の枝を折り取つてきて將軍に捧げ、平和な世でも武芸修行に怠りないことを褒められて、武名は全国にとどろき出世したと語ります。作詞の田中濤外はこの物語を、桜の枝を折り取つてることで、より華やかに仕立てました。戦の悲劇を痛切に語ることが多い琵琶では珍しく、おめでたい場面で演奏できる曲となっています。

詞章

治より乱に入り 亂より治に入り

元亀天正も夢と過ぎ 世は寛永の春風や
身は柳管の主として 威武八荒に耀きし
年少氣鋭の家光は 三百諸侯を引具なし
鞭聲いとも肅々と 三縁山のかへるさに
仰ぐ愛宕の山ざくら 高く崑立つ磴道の
上に翳せる一と枝は 花の風情もいと妙に
心憎くぞ見えにける 何に思ひけん家光は
誰ぞある、馬にて 此の石段を駆け上り
あの枝取つて参れよと 台命今は是非もなく
仕ふる主の面目に 吾れ仕らんと立出づるは
伊勢藤堂の馬術指南 山本右京忠重なり
駒の手綱を引締めて はいよくと勇ましく
二十余段上りしどき 馬は前肢踏みはづし
どうと計りに落ちにけり 繰いて罷り出でたるは
秋田佐竹に知られたる 鳥井喜一郎重房なり
腕に覚えの鞭を揚げ どう／＼と駆け上る

之は如何にと見る中に 石段半途に崩れ落つ

此時馬前に駆け出でしは 三十路に余る武士一人

赤心面にあらはして 彦左が前に申すやう

某こそは讃州の 生駒将監が家臣なる

曲垣平九郎盛澄なり 陪臣の身の恐れながら

仰せを果し候べし 上へ御取計ひ願はんと

聞くより家光喜びて 武道に上下の隔てなし

疾く仕れと仰せける ハツと答へて盛澄は

連錢葦毛の逞しき 逸りにはやる春駒に

打跨りて石段の 前に二三度輪を描き

馬人共に幾たびか 見上げ見下す愛宕山

時分はよしと鞭をあげ はいどうくの懸聲に

蹄の響かつくと 上へ上へと登り行く

あれよ／＼と見る中に 石段半途を過ぎし時

馬上の姿見えざるは 之ぞ曲垣が秘術なる

霞がくれの一 手なり 馬は歩調も乱さばこそ

次第／＼に登り詰め 櫻間近くなりければ

盛澄姿をあらはして 一と枝折りて襟にさし

立つや愛宕の山の上 家光始め一同は

新内節 明鳥夢泡雪（部屋）

淨瑠璃

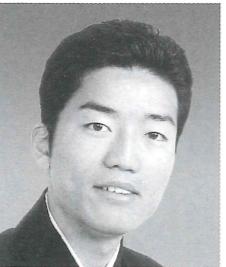
新内 剛士

三味線

鶴賀 喜代寿郎

上調子

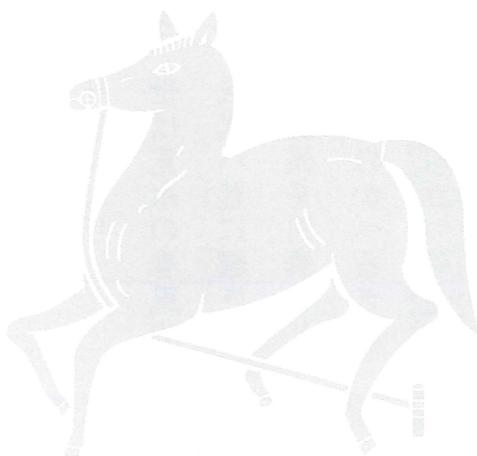
鶴賀 伊勢一郎



新内剛士（しんない たけし）

富士元派家元代行。新内節淨瑠璃方。東京藝術大学、大学院博士課程修了。第二十二回財団法人清榮会奨励賞、第六十八回文化庁芸術祭賞新人賞、第六十五回芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。

鶴賀喜代寿郎（つるがきよじゅろう）
今村昌平の横浜放送映画専門学院演劇科第一期生。
昭和五十三年に鶴賀喜代寿に入門、五十四年に名取。
新内節三味線のほか、新劇関係の作曲・演奏でも活躍。
母校の講師も勤めている。



固唾を呑んで見入りしが 此の有様に思わずも

どつと揚げたる鬨の声 山も搖がん計りなり

嶮磴馬ヲ躍ラシテ一鞭雄ナリ 三百ノ諸侯夢中ニ仰グ

千古ノ絶技誰力又似ン 英姿颯爽春風ニ耀ク

盛澄衣紋ととのへて 馬の呼吸を打鎮め

女坂を廻り悠々と 公の馬前に馬を下り

櫻捧げて平伏しぬ 家光打見て微ぞ笑み

あっぱれ日本一の馬術者と 賞賛たゞへたる言の葉は

家の面目身の誉れ 末世の鑑と残りける

櫻捧げて平伏しぬ 家光打見て微ぞ笑み

あっぱれ日本一の馬術者と 賞賛たゞへたる言の葉は

家の面目身の誉れ 末世の鑑と残りける

明和から安永初期に初代鶴賀若狭掾が作曲したとされています。明和六年（一七六九）七月三日、江戸蔵前伊勢屋の養子伊之助（二十一歳）と、新吉原鳶屋の遊女三芳野（二十四歳）が、三河島田浦の辺りで心中するという事件が起きました。これを取り上げ、時次郎と浦里という名前に置き換え、脚色した新内節の代表作品です。

時次郎は山名屋の遊女浦里に入りあげてしまい、地頭へ出す二百両にも手を付け、親にも勘当されてしまいます。やがて、時次郎は山名屋には内緒で浦里と逢瀬を重ねるようになりますが、自らの身の上を嘆き一人で死のうとします。浦里は一人では死なせないと取りすぎますが、それに感づいた山名屋の亭主は、遣手かやを差し向けて、浦里を無理矢理に庭へ引きずり出します。一方、時次郎も男衆に打ち擲されたあげく、外に締め出されてしまいます。この場面までが浦里部屋で、このあと、時次郎が黒塀を伝つて庭へ忍び入り、折檻を受けた浦里を助けて、共に逃げようとする雪責めの場となります。

「春雨の眠ればそよと起されて、乱れそめにし浦里は、浦里」「ノウ時次郎さん、このようにせきせかれ、さぞ気詰りにござんしょう、それをこらえて

下んすも、わたし可愛いと思うてのお志、嬉しゅうござんす忝い」と、

「抱きしむれば、いや俺ゆえと引きしめて、物をも言わまず締め合ひて、あとは涙にくれけるが。

「男涙をはらりと流し、

時次郎」「いつまでこうして居たどても、限りもなき二人が仲、長居する程そなたの身詰り、

この程段々話す通り、國の親仁の江戸表、地頭の方へ出す金、二百両はさておいて、

そのほか一門出入り屋敷、語りつくしてこの有様」

「そなたも共にと言いたいが、愛しいそなたを手にかけて、わが亡きあとで一遍の、回向を頼むやらばやと言いすて立つを取り付いて、

あんまり酷い情けなや、今宵はなれてこなやんの、かねて二人が取り交す起請誓紙はみんな仇、

どうで死なんす覚悟なら、三途の川もこれこのよう、二人手を取り諸共と、なぜに言つては下さんせぬ、

わしゃ遣りはせぬ放しはせぬ、殺しておいて行かんせと、男の肩にとりついて、身をふるわして泣きいたる。

「遣手のかやが、声として、

「浦里さん／＼、ちょっとお目にかかりましょう」

「へと呼び立つれば、浦里はつと思えども素知らぬ顔して、聞けば昨夜から居続けにござすげなが、

「浦里」「アイ、何の用でござんす」

「へと言えば、かやがつこと声、

「遣手」「いや、他の用でもござんせぬが、あのお前の客衆は、聞けば昨夜から居続けにござすげなが、

「旦那が呼ばんす、サアござんせ」と、

「罪も報いも後の世も、白髪頭のこめかみも、張り切るば

かりのやら腹立ち、引っ立て、こそ下りにける。
「あとに大勢男ども、



淨瑠璃

常磐津 八重太夫

常磐津 仲重太夫

常磐津 文重太夫

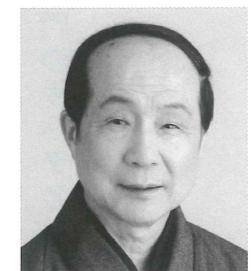
三味線 常磐津 菊寿郎

岸澤 式松

常磐津 菊太郎



常磐津 菊寿郎（ときわづ きくじゅろう）
昭和五十六年、父・初世常磐津菊寿郎入門。紳寿郎を名のり、大阪中座「男女道成寺」で初舞台。平成十五年浅草歌舞伎「奴道成寺」で立三味線を勤める。平成二十五年五月叙勲、旭日双光章授与される。
二十四年一世菊寿郎襲名。



常磐津 八重太夫（ときわづ きくじゅう）

昭和十六年群馬県生まれ。平成四年、常磐津八重太夫リサイタルを初めて開催し、文化庁芸術祭賞を受賞する。平成十二年六月、常磐津節保存会会員。平成三十一年五月叙勲、旭日双光章授与される。

解説

権八（廓の仇夢）

白井権八は郷里の因幡において、本庄助太夫を討つて立退き、江戸へ下る途中、東海道第一の要所大井川を越し、その上多く殺人の罪を犯し、終に捕われて、鈴ヶ森の刑場にひかれます。然し、それは、馴染の新吉原の遊女小紫の部屋に隠れてみたる、一夕の夢でしたが、其実正夢となつて、追手に囲まれる一段です。大正八年十月、日本橋俱楽部に於いて、常磐津家元秋季大会の折、十四世家元、常磐津文字太夫、小文字太夫（十五世家元）合作。作詞は、竹柴金作。常磐津の代表曲、将門の「嵯峨や御室の花盛り」、また、戻り橋、宗清などは、古典・時代物として有名ですが、白井権八・小紫、通称「権八」のこの曲は、当時、大変に好評を博した常磐津家元系の曲です。

詞章

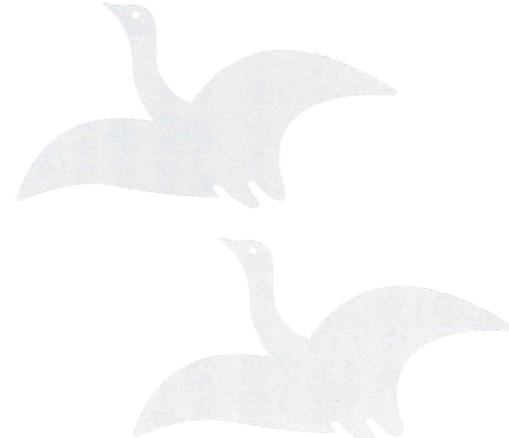
権八へ思ひ廻せば某は
ひ来て忽ち来る天の網
ある科あればさらく厭ひは無けれども
匿くれし長兵衛殿男を磨く其人に由なき汚名を取らせ
るが今はの際の心懸り是も誰ゆゑ恋の罰御見物の其内
に若いお方は取分けて慎むべきは恋の道此権八を手本
ぞと必ずくお上へ御苦勞懸けぬやうアア慎むべきは
色欲ぢやなア

へ身の縹言は今更に別れの駒の片手綱
見ゆる往来も涙橋急ぐにつれて程近く仕置の場所へ着にけ
るへ検視の役人懷中より一つの書物取出し
「一つ其の方儀是まで多くの人を害し其のみならず先年
東海道一の閑所たる大井川を破りし科重々不届至極に

付き 鈴ヶ森にて磔の刑罪に行ふものなり ソレ用意よくば
 其なる柱へ ハアヘ 檢視の差図に非人ども 下知に従い 権八
 を 角の柱へ縛むる 情用捨も荒磯に 非人は左右へ立別れ
 十字に綾取る繩檣 槍は彼世の道案内 エイと懸けたる聲
 諸共 突込む肋骨非人が手練 抜けば溢る血潮の瀧つ瀬
 又引抜き二の槍を 既に斯よと見えたる所へ へ群衆押分け
 傾城の 形もしどろに駆入るにぞ へ検視の役人目に角立て
 檢視 「ヤア見れば女の分際で 刑罪の場所へ叶はぬ事だ下が
 り居ろうと極付くる へ苦痛の権八 アア両眼開き
 権八 「そう云ふ其方は小紫 さては苦界の廓を脱け
 小紫 「サア 死なば一所と大門の 捷巖しき廓を脱け 仕置
 の場所へ来たからは 権八様と諸共に どうぞ殺して下さり
 ませ 檢視 「ヤア女心の血迷しか 取上せて何を申す 叶はぬ願
 キリく立と へ情用捨も荒くれし 非人が手込引立てられ 仕置の場所の
 小紫 「悲しい憂目を見ぬ内に いっそ私は自害して
 権八 「アアいや死ぬには未だ早い たとへ此家を十重二重
 捕手の者が囮むとも 腕に覚の権八が 刀の目釘の続くだだけ
 斬つて／＼斬り散し 和主と共に廓を落延び 目黒の知邊
 へ身を落着け 逃れぬ時は二人一所に

へと告げるを聞いて小紫
 小紫 「是やまだどうしやう どうしやうぞいなア
 権八 「さてこそ今の仇夢が 真となりて権八が 進退茲に谷
 りしか かねて覺悟の事なれば 必ず共に心静に
 小紫 「かな 悪い憂目を見ぬ内に いっそ私は自害して
 権八 「アアいや死ぬには未だ早い たとへ此家を十重二重
 とりて もののか うでおぼえ がたなめくぎ つゝ
 捕手の者が囮むとも 腕に覚の権八が 刀の目釘の続くだだけ
 斬つて／＼斬り散し 和主と共に廓を落延び 目黒の知邊
 み おちつ のが おねし とも くるわ おちのの
 へ身を落着け 逃れぬ時は二人一所に

を遇さず召捕ると この三浦屋を 取巻いて居りますわい
 なア



小紫 「ほんに主の言はしやんす通り 重い仕置に遇ふ時は
 死なば一所と思へども 出るに出られぬ籠の鳥 へ本に思へ
 ば去年の秋 丁度月見の大一座 退る間もなく戻らねば な
 らぬと言ふを悪留に 夫恋ふ鹿の笛ならで障るともなく現な
 く ヒツタリ抱き月の梅 へ離れ難なき折からに へ廊下傳
 に新造の 胡蝶は慌て駆来り

蝴蝶 「モシモシ花魁工 大変でござんすわいなア モ大変で
 ござんすわいなア 小紫 「何大変とは氣懸りな どうした譯であります
 蝴蝶 「サ 権八様が宵の間に 二階へ忍んでござんしたを
 遣手のおつめが喰付いて 役所へ知らせたばかりに 今宵

ぞ知れける



解説

廓八景

くるわはつけい

この曲は吉原遊里の景物を瀟湘八景になぞられて、弘化元（一八四四）年、四世十寸見河洲の一周年忌追善淨瑠璃として、河内半次郎方で発表された。作詞は劇神仙（宝田蓬萊）長嶋壽阿弥）、作曲は五世山彦河良。

三味線音楽には、八景ものが数多く作られていますが、これもそのひとつ。

吉原の八景をかぞえあげ、それを近江八景になぞらえ、さらに春夏秋冬の順に並べてあります。狂言作者らしい手なれた構成で、作曲はいかにも河東節らしい手でまとめてあります。

披露の時の演奏者は 淨瑠璃 十寸見蘭洲、十寸見東寿、十寸見蘭示 三味線 山彦河良、山彦小文次、山彦小新次で三絃手附は山彦紫存（可慶翁）と記されてあります。

詞章

上調子へまづ春の仲の町、へ入相霞む黄昏に簾掲ぐる軒の端、
大門口の晴嵐と、言へば岩間の水洩らさじと、結ぶ契りの盃
を、へ差すが恥らふ突出しは、見て見ぬ振りの流し目に、へ
照り添ふ顔の夕日影、初会の夕照是ならん。合、音頭へ忍ぶ籬
に身を焦す、闇の螢の間夫狂ひ、閑に閑守る神々も、ああ恨
めしき裏茶屋の、へ蒲団に濡るる夜の雨、へ蓑虫すだく夕暮
れの、淋しき知らぬ盆燈籠、光は露の玉菊が、へ二十五絃の
へ爪音は、琴柱に落つる雁の声。へ空艤押すかと聞き迷ふ、
是や座敷の帰帆にて、風の便りの玉章を、頼み田面の節供へ。
の名に負ふへ八文字、鶴の歩みの白小袖、是ぞ暮雪と宛然に、
三浦山口家々の、名取りの君の髪には、三下りへしんど命も皆
なげばし投節の、へ声も曇らぬ秋の月。へ櫓子に洟るる霜の色。
へ土手の風誘ひ来て、へ晩鐘寒き夕べにも、浮かれ廊の
全盛は、夢か現か白柄組の、ナオルへ其大小の神祇組。天の
浮橋かけ初めて、恋教鳥妹背鳥、鶴鴎組の急き立てて、いざ
供せよと言ふ間に、長が許へと急がるる、伊達の遊びぞ面白き。

淨瑠璃	山彦花葉
山彦正子	山彦千子
上調子	山彦朋音
三味線	山彦美浦
山彦まさこ予	



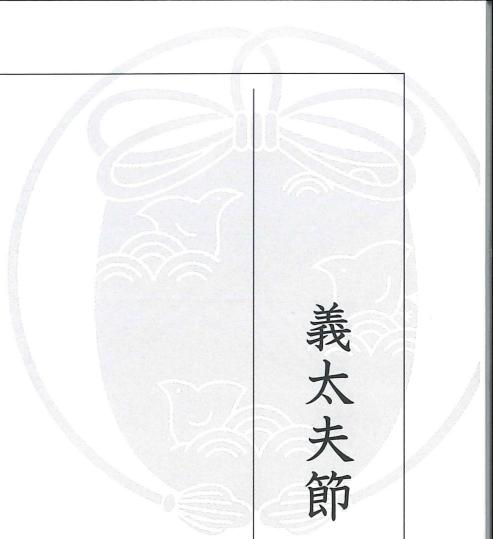
山彦千子（やまとひこせんこ）
河東節淨瑠璃方。人間国宝。昭和五十三年河東節の六世山彦
河良に入門後、山彦節子、山彦貞子に師事。五十六年山彦千
子の芸名をゆるされる。平成十二年財清榮会奨励賞。平成
二十一年重要無形文化財保持者。平成二十六年旭日小綬章。
古曲会評議員。



山彦花葉（やまとひこかよひ）
河東節淨瑠璃方。平成十五年七月山彦千子に師事。平成
二十一年三月山彦花葉の芸名をゆるされる。平成十六年六
月歌舞伎座海老藏襲名興行にて助六由縁の江戸桜にて初舞
台をふむ。第四十五回邦楽演奏会にて乱髪夜の編笠に出演。
古曲会評議員。

義太夫節

碁太平記白石嘶より「新吉原揚屋の段」



解説

碁太平記白石嘶より
「新吉原揚屋の段」

紀上太郎、鳥亭焉馬らによる合作で、江戸時代後期・安永九年（一七八〇）、江戸外記座初演。姉妹による仇討ちの実話から想を得て書かれた作品です。この段は「揚屋」と呼ばれる華やかな遊郭が舞台となっています。

奥州白石から、幼いときに別れた姉を探して江戸へ出てきたおのぶは、偶然にも江戸・新吉原の揚屋・大黒屋で、全盛を誇る傾城宮城野となっている姉と再会します。父が非業の死を遂げたことを知った宮城野は驚愕すると共に、妹のこれまでの辛苦に涙します。本日の演奏はここまでとなります。この後、姉妹は父の仇を討つべく廓を抜け出そうとしますが、その話を陰で聞いていた大黒屋亭・主惣六が、曾我兄弟の仇討ち物語を引き合いに出し、仇討ちを成就させたためには、早まらず時節を待つようにと二人を諫めます。仇討ちものではありますが、奥州育ちのおのぶの言葉も特色となって、江戸の廓の賑やかさを伝える義太夫節です。

詞章

入相の、鐘さへはやく、暮れはて、廓のうちには万灯会歌舞の菩薩の色揃へ、わけて全盛宮城野が部屋は上品奥二階、簾笥長持鏡台の、埃取りまで綾錦袱紗なりけるありやまなり。この君の一字なりとも次の間から、宮里宮柴打連れて

「太夫様ご機嫌はえ、ホンニさつきに貸本屋が参じて、『先度の曾我物語の次ぢや』と言ひて、置いて去んだぞえ」

「イヤ申し宮柴様、けふのお客は仲の町の薦屋から、締めからんだ二人一座、宮城野様はもとよりお前もはよう身仕舞して」「オ、忙し、いま身仕舞をするわいな、しかし差合ひな顔はないかえ」

「イエ／＼どれも／＼侍衆、一人のお方は器量よし、今一人は髭むぢや、目の大きい、熊か人かといふやうな、どちらへ札が落ちようやら、厭なことではないかいな」

と、いづくの浦も客噂、そしるも廓の習はしかや

「テモヤても、わさ／＼一人物言ひて、よい氣ではあるほどに

宮城野 竹本駒之助
おのぶ 竹本綾之助
宮 里 竹本土佐恵
三味線 鶴澤津賀寿



鶴澤津賀寿 (つるざわつがじゅ)
(一社) 義太夫協会理事。義太夫節保存会会長。平成二十一年重要無形文化財保持者個人認定。十五年紫綬褒章受章、二十年旭日小綬章受章。二七年文化庁芸術祭音楽部門大賞受賞。昭和二十四年竹本春駒に入門。四十五年四世竹本越路大夫の門人。



竹本駒之助 (たけもとこまのすけ)
(一社) 義太夫協会理事。義太夫節保存会会長。平成二十一年重要無形文化財保持者個人認定。十五年紫綬褒章受章、二十年旭日小綬章受章。二七年文化庁芸術祭音楽部門大賞受賞。昭和五十九年竹本春駒に入門。四十五年四世竹本越路大夫の門人。

の、コレしげり、そなたはそこら片付きや」

と、言付ける間もありやなし新造二人が伴ひに、厭がる者を無理無体、突き出されたる田舎の娘、傍りきよろくつひに見ぬ、錦の小より三つ蒲団、興醒め顔に

「オヤ／＼おん女郎さあたち、人がよく寝そべつてをると

ころを、用さある来どらへと、二階さあへぶつち上げて、コリヤマア何たるところだ、もしやあどこもかも光り申して、お洒落洒落の櫛さあ見るやうに、塗りこべえた簾笥さあ、その上夜の物も金切れたものしあ、蒲団も蘇枋染蘇枋染の色のよさア、うんら寝まつたら、踵踵の輝輝さあ引つかゝつて、うつ切れべえ、おやつかな魂消申す／＼

と言ひければ、

「オ、モ何も言ふぢややら、すつきりと訳が知れぬ、そしてマア吉原で、名高い女中を姉様とは、モ雲つかむやうな尋ね物」
「サアそれだアから頼み申さアよ、きのう観音さあで、目眼のおつかなえ人が、連れて行て会はしてやらうつと、駕籠さアにぶち乗せて来るところを、これのご亭の世話さあになり申

いて、昨夜からる申さアよ、脚かけ申すも他生の縁、ほんと

と繩り寄るを突退けて

『もしやそれぞ』と摺り寄つて

「さつきにからの話を聞けば、姉を尋ねる人さうな、奥州はどうらの生まれ、なんといふ所ぢやえ」

「アイサア、奥州は白坂近在、逆井村といふ所」

「フウその逆井村といふ所に、与茂作といふお人があらうがの」

「アイサ、その与茂作といふのはめらしが父」

「ヤアそんならわしが妹」

と懐かしながら油断なき

「オ、利口な人／＼、疑やるも尤も」

と立つて簾笥の袋棚襖開けば恭しう、浅草寺の觀世音、扉表

具に押並べ、飾り置いたる筒守り見るに妹も疾し遅し首にかけまく壺井の守り

「コレ／＼、この姉が国を出る時、母様が大事にせいと下

「ござるわよ赤はらはたれ申さぬぢや」

「ホヽヽヽヽオヽ聞けば聞くほどをかしい話、そして今の赤ホヽヽヽモ、赤はらとは、あられもない」

と若い同士糠もくづる、高笑ひ、知る人ぞ知る宮城野が、押しげめて

「申しお二人、浪花の芦も伊勢の浜荻、所々で変る物言ひ、そのやうに笑はぬもの、今あの子の言ふてぢやあつた、だたあやがあまといふはな、ここで言ふ父様母様、または赤はらと言ふてぢやは、嘘はつかぬといふ事ぢやわいな」

「さつても我折れマようご存じ」

「オ、知つたも無理か憂きふしは夜毎日毎に変る枕、心尽くしの果ては愚か、奥のところのお客にも馴れ親しんだ身の一徳、オ、そのお客様で思ひ出した、奥のお客がやかましかろ、私も追付けそこへ行く、先へお出でてよいやうに、

「そんならわしらも奥へ行て、お客様の榮耀も言はず、寝そべる度に、ア、何やら、オ、それ／＼、赤はらたれて気に入つて、日がら頼も」

と口々に言ふて、座敷へ行くふりを見やる宮城野おのぶが傍、

と問はれて『わっ』と声を上げ、

「オ、姉さアでござるかいなう、会ひたかった」ともろともに、嬉し懐かし鎌り寄り、ほかに詞もなくばかり、

「オ、妹、よう尋ねて来てたもつたの、年端もいかぬそなた、父様なりと母様なりと、いづれぞ付いてお出でゞあろう、がもし道中ではぐれてか」

と、問はれて『わっ』と声を上げ、

「エヽ遠国隔つた姉さあ、それで何にも聞かねえな、父は五月田植の時分、代官志賀台七といふ悪侍に」

「ヤア／＼、何と言やる」「ぶつ斬られてお死にやり申した」

「エヽ」

とびっくり差込む癪

「アアコレ姉様いの／＼」

「アヽヽヽとつとモウ悪い時、そうしてどうぢやその後は」

「サア俺だけもすんでの事殺さる、どころ、庄屋の伯父さあが

引取つて、『奉公しろ』と言ひめすけど、何の奉公どころかい、

口惜しいと、悔しいで、後先思はず、檀那寺へ駆込うで、

がいに、苦労とは思はなんだ、しかし会うたらかっぱりと、しょ

ろつ骨が抜けたやうな、コレそれがいに歎かっしやる手間で、

妹はるばる尋ねてよう来てくれた、めぐやめらしと言ふてく

んさい姉さあ」

と、あやも泣入る稚な気に、長の旅路の憂き苦労、思ひやる

せも宮城野に、続くは末の、松山を、袖に、波越す涙なり。



長唄

風流船揃

杵屋 吉之亟

杵屋 君三郎

杵屋 六袒悟

杵屋 喜之彦

杵屋 浅吉

稀音家 一郎

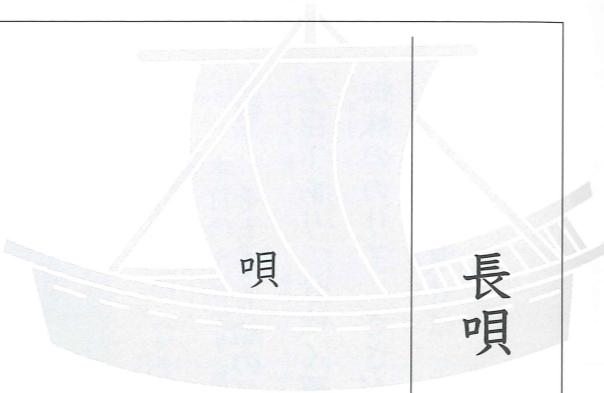
福原 徹彦

堅田 昌宏

福原 百之助

福原 貴三郎

笛 小鼓 大鼓 太鼓



杵屋 佐吉 (きねや さきち)

昭和二十八年、五世杵屋佐吉の次男として東京に生まれる。四十六年、曾祖母の名を継ぎ佐喜を名乗る。平成五年、佐門会家元七代目を襲名。(一社)長唄協会常任理事、現代邦樂作曲家連盟同人、樂明會同人。長唄佐門会家元七代目。

福原 徹彦 (ふくはら てつひこ)

笛方 昭和三十八年東京に生まれる。十歳の頃より六代目福原百之助師より笛の指導を受ける。現在、演奏会、舞踊会等で古典を中心活動している。

東京芸術大学非常勤講師 NHK文化センター青山教室講師。(一社)長唄協会普及育成委員

解説 風流船揃

二世杵屋勝三郎作曲。

安政三年（一八五六）の作。船の由来に始まり、のどかな海に浮ぶ船の眺め、つづいて隅田川の船遊び風景を唄つています。唄、三味線ともに賑やかで派手なのが特徴です。江戸時代の陽気な船遊び気分の出ている点が面白い名曲で、現代もよく演奏されます。しかし、この曲がつくられたのは、安政大地震で江戸が焼野原になつた翌年のこと。消失前の華やかな情景を思う気持ちを唄に込め、江戸の民は一日も早い復興を願つたそうです。

詞章

本調子 そもそも船の始まりは 唐土皇帝に仕えし 貸狄といえ
る臣下あり 秋吹く風に庭の池へ 散り浮く柳の一と葉の上に
蜘蛛のりて ささがにの糸引きはえし姿より 匠出だせし舟
とかや 見渡せば 海原遠く真帆片帆 往き交う舟の数々は

霞の浦に見え隠れ 白浪寄する機近く 千鳥かもめのうき姿
網ひく舟や釣り舟のみな漕ぎつれてゆき通う 眺めのどけ
り 清く流るる隅田川 月よ花よと漕ぎいだす 屋形屋根舟
に 山谷の堀を漕ぎ出だす 恋の閑屋の里近く 向島 軒を並べし屋根舟のすだれのうちの爪弾きは もしや
それかど人知らず 気をもみ裏を吹き返し 遠か向うを 猪牙荷足
三下り 上げ潮に 佃つくだと急いで押せば 三味線ひきつれて 様は山谷の三日月様よ
ばかりしょんがいな 負けず劣らぬ行きあいの舟の横から
三筋の糸の二挺鼓を打つやうつつ波の舟 生れ
れど 聞いてびっくり 丸三杯飲んだ盃 おもかじ
面舵 取舵 声々に 乗りしお客の氣も浮かれ
力イ払つて 一拳押さえましよう 拳うちやめて踊るやら
ならして唄うやら しどもなや
賑う隅田の川づらは これぞ眞の江戸の花 栄うる御代こそ
出たけれく

本日のナビゲーター
葛西聖司（かさいせいじ）



本日のナビゲーター

葛西聖司（かさいせいじ）

主な著書	アナウンサー・古典芸能解説者。 『僕たちの歌舞伎』（淡交社） 『名セリフの力』（展望社） 『ことばの切つ先』（展望社） 『文楽のツボ』（日本放送出版協会） 『能楽入門2 能の匠たち』（共著、小学館） 『能狂言なんでも質問箱』（共著、檜書店） 『歌謡曲のカーネンサーふたり口ずさみ語る』（共著・展望社）
大学の教壇にも立ち、執筆活動も続けています。	一九五一年東京都生まれ、中央大学法学部卒業。NHKアナウンサーとしてテレビ、ラジオのさまざまな番組を担当してきた。現在はその経験を生かし、歌舞伎など古典芸能の解説や講演、また日本伝統文化の講義などで

本プログラムの詞章は実際に演奏される部分のみの掲載となっております。

全曲分の歌詞をお知りになりたい方は、それぞれの協会までお問い合わせ下さい。

邦楽実演家団体連絡会議（事務局 日本三曲協会内）

一般社団法人 義太夫協会	事務局 電話 03-3541-5471 http://www.gidayu.or.jp
清元協会	事務連絡所 電話 03-3739-6765 http://www.kiyomoto.org/
一般財団法人 古曲会	電話 03-3431-3336
新内協会	電話 03-3260-1804
常磐津協会	事務局 電話 03-3636-2220 http://www.tokiwazu.jp/
一般社団法人 長唄協会	事務局 電話 03-3542-6564 http://www.nagauta.or.jp/
公益社団法人 日本三曲協会	事務局 電話 03-3585-9916 http://www.sankyoku.jp/
日本琵琶楽協会	電話 03-5371-0120 https://nihonbiwagakukyokai.jimdo.com/
特定非営利活動法人 筑前琵琶連合会	電話 0467-51-9798 https://sites.google.com/site/chikuzenbiwanpo/
公益社団法人 日本小唄連盟	電話 03-5641-0830 http://www.kouta-renmei.org/
一般社団法人 大阪三曲協会	電話 06-6245-0366 http://3kyoku.com/
一般社団法人 関西常磐津協会	電話 06-6214-0753 http://www.kansai-tokiwazu.com/
公益社団法人 当道音楽会	電話 06-6768-1913 http://todo-ongakukai.jp/
名古屋邦楽協会	電話 052-229-8980 https://sites.google.com/site/hougakunagoya/

次回の邦楽演奏会は平成30年3月4日（土）を予定いたしております。